

に続行した。丸山支隊は二十四日瑞昌付近に進出し、波田支隊の左翼に連係して瑞昌を攻略した。丸山支隊は徳安北方に向かう攻撃前進を準備。

丸山支隊は南東進し、二十九日夕に岷山、九月三日午後には馬廻嶺に進出……

このように防衛庁の公刊戦史に記されているが、岩田氏は歩兵第三十五連隊の二年兵として作戦前後の中支（揚子江南岸地域）で戦闘・警備の任についていた。

この度の証言は、中支蘇州付近の戦務を毎日記録した日誌に基づいて記されている。これにより、外地での日々の勤務、生活、感想等が赤裸々に語られているが、その一部を記載したものである。

遥かなり中国戦線

山梨県 長坂 義行

大正二年四月三日、山梨県北巨摩郡更科村上の山九三番地に生まれ、昭和十六年四月、九三三番のところへ分家しました。昭和十四年十月、葦崎町に合併、同三十一年十月葦崎市になり、現住所は葦崎町上の山九三二です。祖父母、父母、叔父二人、兄二人の大家族です。中堅の農家ですが雑貨商等も兼営しておりました。

葦崎青年学校専修学校を卒業後農業の他、自営業も兼業していました。昭和八年に入営、帰郷後在郷軍人として奉仕し、簡閲点呼が七回、教育召集が二回ありました。また昭和十四年・四泊五日、昭和十五年四月・七泊八日で甲府第六十三部隊に短期入隊しました。

昭和十六年一月に東京世田谷の東部自動車隊に召集になりましたが、その時二十七歳でした。中隊長は伊

藤大尉で第一中隊の班長は吉野新太郎軍曹でした。四月に召集解除となりました。三カ月の教育召集でも初年兵同士の往復ビンタが絶えず、古兵が後方でけしかける始末。今考えると、あの私的制裁が初年兵に忍耐と反抗心と敵愾心を育てたと思います。

班長の当番をやったお陰で毎週外出許可をもらい、上海で重傷を負った先輩を新宿の第二陸軍病院に見舞いに行ったり、暇もできたので勉強もできました。

昭和十七年九月、再び召集になり東部第六部隊近衛騎に入隊しました。上等兵以下三〇〇人ぐらいでした。軍隊貯金はしましたが送金はいたしません。後で知ったことですが家では人手が減り、収入は三割ぐらいに落ちたことでした。音信はよくあり、また慰問袋、新聞もよく送られてきました。

一カ月近く待機して、いよいよ中国行きです。輸送指揮官は第六部隊の加藤少尉です。現地到着まで志願して加藤少尉の当番になりました。広島から出港し、釜山に上陸しました。そこで各地からの召集兵三〇〇〇人の結団式を行い極秘の夜行車で出発しました。主

力部隊と山海関で別れ、蒙古の包頭城外で滝兵団と別れ、われら六〇人の輜重隊は山根部隊に配属になりました。

第一中隊の第三班には私一人です。十一月下旬、戦車隊第三中隊第三班に編入替えになりました。

滝兵団は内地の騎兵部隊の集団で、特に対戦車隊は内地一・満蒙一の割合でしたが、新たに一個師団編成になりました。中国各地の部隊、遠くは印度支那の部隊からも戦車隊が集結しました。十二月中旬に編成を完了、師団長は内地からの山路秀男中将です。

関根隊は師団の整備隊で城内、私達輜重隊は城外です。部隊も大きくなり、部隊長は小松大佐です。任務は包頭から三〇キロから四〇キロ北方の軽戦車隊、重戦車隊、軍の諸施設機関、蒙古兵部隊の警備です。夏は大同に南下して滿蒙境界を北限に有線資材の輸送、補給と資源（石綿・雲母）の後方輸送です。仮想敵ソ連戦車への体当たり、対空演習、大同西南方の討伐、黄河渡渉口歩哨、水源地歩哨などで下士官、兵八人の一週間勤務でした。

昭和十九年一月五日付で経理部野戦倉庫勤務。下島准尉から「師団長命令で優秀な兵を派遣せよ、との命でお前を選んだ、部隊、中隊の名を汚すな」の訓辞を受けました。各部隊への補給が任務でした。

三月末、下士官から倉庫の鍵を八個預かりました。その下士官は近く原隊に帰る予定になっていたからです。

四月一日、演習命令で出動、四月三日、北京城外で各部隊に食糧、甘味品を補給。五月一日に洛陽にいる司令部の西よりの師団は車両により三方面に展開。司令部最南端の三個師団が洛陽に動き、別に一個師団が北から南へ、南から北へと行動を起こした。河川の橋は全部敵が破壊し、その中に有名な洛陽の石橋もありました。戦場跡の徐州の鉄道には機関車が横転し悲惨な光景が次々に現れてきました。定州は過去三回戦場となり見るからに貧困そのものでした。黄河の橋、鉄路は土手越しに望見されましたが、これは友軍が昼夜兼行、二日で完成したと聞きました。

前方の家屋に友軍戦車が上り始めると家屋は潰れ、

次々と進路を切り拓いていきました。司令部は車を貨車に、兵隊も夜間に乗じて南方の許昌から、自動車は済南から西方洛陽へと進みました。初戦は侯県、城内に敵四〇〇人ぐらいいるが迂回すれば抵抗しないだろうと甘くみたのです。

夜、進撃すると待つてましたとばかり敵は発砲、雨霰のようにブスブスと近くに飛来しました。弾は近く、危ないぞと叫びました。前方で護衛中隊が応戦。閣下がおる軽戦車から無線でさかんに「応援を頼む」の打電がありました。我々は近くで伏せたまま身動きもできません。生きた心地もしませんでした。

先方に兵器部、後方が軍医部、その後に輜重隊、他に応援の友軍がいました。明るくなり始めたころ、敵は退却し始めました。城壁を遠方にみてそのまま前進。当初、敵機はこず、昭和十九年中は昼間でも前進ができました。

河川には友軍の鉄舟に工兵隊が架橋し、我々の車両を渡しました。予定は大幅にずれましたが古都の洛陽戦もやっと目鼻がつきました。古来、内戦にも無事だっ

たと聞いていただけに、城外に三個部隊、二重壕に囲まれ、一万三千人の古松師団が一夜で半数の死傷者を出したのは予想外でした。

ようやく、敵の反撃を食い止め、後方の敵を西南方に追跡すること五日間、時には一晚中道路に伏せたまま撃ち合いました。その後、再び引き返し再度の洛陽攻撃を実施しました。当初から二週間ほど遅れ、敵は一部降伏し一部逃散しました。友軍は威嚇射撃で住民を離散させ、野菜などを城外の畑に取りにいきました。巻脚絆を着けたまま戦死している姿の友軍の兵に戦闘の熾烈さを知りました。

西門前で友軍の自動車が地雷に触れ、兵隊もろとも空に舞い上がるのを見て、その後城内に入りました。街路の両側の家屋は空で全戸が傾いていました。ときたま、婦人・子供の姿を家の中に見かけました。

私たちはまた急いで引き返し、洛陽から西南の五原に向かいました。司令部は鉄道沿いに南に一週間前進しましたが、敵との交戦は無く引き返してきました。路面には何日も経った死体や白骨が至る所にあります。

た。二週間ぐらいで出発点の後方の効県に戻りました。命令で倉庫長以下十四人、昭和二十年二月まで侯県で補給業務に従事しました。城内には治安維持会が生まれ、平和が甦り、平和な街となり日本軍と争った場所とは思えないほどでした。城内の速射砲部隊、二十五キロ南方の部隊に物資の補給を始めました。許昌貨物廠へ指揮官の引率の下に物品の受領と民家からの買い付け業務に出かけました。

日本の当時使った貳銭銅貨（トンズル）の中に友軍の物か分かりませんが自動車のラジエーターまで出てきて、買ったものは後方に送りました。

昭和も二十年を迎え、桂林から敵B29が昼夜、上空に飛んでいるので日中は行動ができず、夜間無灯火で車の後部に藁半紙を貼り、それを目安に走りましたが早く走れません。敵機は進路を予想して路上を追ってきて、点火栓の火花を目当てにバリバリと機関砲を撃ってきます。友軍は手早く車を止めて逃げました。東の空が明るくなる前、師団長命令で城壁の無い、至って小さな部落の家屋の軒に車をつけ偽装しました。

昼間は携帯燃料で煙を出さず、衣類も外部に出しません。入り口の路上は暗いうちに掃いて足跡を消しました。敵機は低空で毎日部落の上を飛行しました。低空だったので撃てますが、居場所を発見されるので絶対射撃しません。司令部はいつも安泰でしたが、他の部隊では洗濯物で集中攻撃を受けました。

敵機は鳥が舞うように悠々集中爆撃し火災を起こし去っていききました。私は目の前の惨たる悲痛な状況を見ました。夕暮れを待って出動命令。野戦病院が、かの林、この林と湘南、武漢三鎮戦へと出ていききました。師団の半数が作戦に出動、揚子江の橋上での友軍の犠牲は大きいものでした。

私共は桂林作戦で中支近くにまで前進しました。桂林飛行場は友軍が占領し、私共經理の者は陥落している姿を夜になって見ました。中国で民家の焼けるのを時に忌むそうですが民家の焼けるのを見ました。日本軍を悉く見せるために敵が放火したのだとも言われました。

七月下旬、今度は電灯のつくところへ移動するとの

話がありました。それでは満州だろうか、先発隊として北京城外の豊台にいきました。

内務班の時は伍長に進級していました。それまでに精勤賞を三回受賞しました。また司令部のように上司の多い所では原隊のように階級はさほど感じませんでした。原隊には内務班が温存されていました。内地の本部自動車のような無茶なことはありませんでした。

世田谷では他中隊でしたが逃亡兵もできました。野戦ではよく後弾がくるぞと言われましたが、将校も第一線で疲労困憊、兵は疲れ果ててそれどころではありません。たまに将校の日本刀に車のバッテリー液を入れ、抜けなくなるような悪戯はしました。勿論、訳の分からぬことを押し通したり、威張りちらすような人が狙われます。私も啞然とするようなことがありました。

衣食は經理の管轄でしたが、最前線で、しかも物資の輸送も一カ月以上無く、給与がよいはずがありません。第一線の部隊は現地調達で、芋類、甘薯の苗取り、小麦の強制買い上げ、牛の借り上げによる荒粉挽きで当座を凌いでいました。茶のないのにも苦勞し、准尉

のお伴をして桑の葉、柳の葉を集めて飲みましたが、色だけは出ますがとても飲める代物ではありません。

河南は他地区に比べると治安もよく、農産物は豊富で倉庫には備蓄の品物もあり、部隊の補充にそこから買い上げていました。そのような状況ですので、戦闘能力や統率も維持されていました。

昭和十九年後半に補充兵がきました。強兵はいなくなっただのか、良家の子弟のみ入隊したのか丙種の兵隊でした。殴るな、盗るな、員数合わせをやらせるなど古兵は班長に命じられ、やらせた者が罰せられることになりました。初年兵は安心して軍務に精励でき、現地住民との交流もうまくなりました。

司令部は班組織になり、作戦と同時に拡声器で放送、映写機でも放映しました。また維持会を結成させ、部隊との連絡を密にしました。日本軍の悪事を、年月日、部隊名ごとに報告させ該当部隊に通知して軍規を紀させました。このことにより原住民から多大の信頼を得て、駐留部隊と共に中秋の名月の日に竜の舞に招待されました。部落の床屋でも散髪をしてもらえるように

なりました。戦闘には勝ち、貯金もできたと喜ぶほど安寧な日が続きました。

昭和十八年原隊当時、半日内務班で休養をとり就寝した以来、これという病気もなく、司令部の全行動に参加、強兵印でした。

先発隊として北京城外豊台で一週間待ちましたが後続部隊が到着せずやきもきました。司令部の将校から日本は空と海では負け戦だが大陸では勝ち戦だと聞かされていました。冷静に待つうちに後続部隊も到着しました。

後続部隊の到着と相前後して、あの歴史的な八月十五日を迎えました。司令部では冷静に対処したと思います。兵器を中国正規軍に渡そうとすると、北京の治安は是非日本軍でやってほしいと受け取らず、止むを得ず復員までということで引き受けました。

復員の時、部長から「長坂、残れ」と言われましたが振り切っても断るように班長に言われその通りになりました。内地には子供が二人いてよく留守番をしていてくれるので、日本が無条件降伏をした以上、もう

無理することはないと心に決めました。経理部長への義理もありましたが「みんなと一緒に帰らせて下さい」と申し出ました。本部や他の将校の助言もあり第一陣で帰国できることになりました。

師団長名の善行賞をもらい、兵器類は返納と短時間で忙しい思いをした。小銃弾を一発記念品にと物入れに隠して帰国しました。

二〇〇人が一団となり復員しましたが、乗船地で足止めにあい、復員時の注意、帰国時の留意事項などいろいろ注意がありました。

青島港から乗船、十二月二十五日に佐世保港に上陸しました。検疫終了後二十七日の夜行に乗りました。依田中尉をはじめ何人かの師団司令部関係者も同じ復員列車でした。

野戦時代を顧みると「兵隊が一番可哀想」の一語に尽きます。経理部から部隊長食、将校食も出しましたが、兵隊はいつも同じもので特別食などありません。復員の時も下士官以上に五本の羊羹を補給しましたが二年兵でも三年兵でも兵には支給されません。佐世保で何

人か、出征時の住所、乗船名を知らず右往左往していた兵の姿が心に残ります。

私の戦争体験と銃後の家族

京都府 森 本 克 己

私は大正七年九月十六日、京都府加佐郡新舞鶴町字浜三二六で生まれ、父は舞鶴要港部工作部に勤務していた。父は真面目に勤務していたが、呉海軍工廠からの転属のため、給料も低く、昼夜を分かつた勤務して生活は苦しかった。私たち子供も父母の苦労を見て育ったので、小学校の遠足には欠かさず参加はしたが、修学旅行は父母の勧めにもかかわらず参加しないこともあった。

私は昭和八年三月、同町立新舞鶴尋常高等小学校高等科二年を卒業し、四月には父の勤務先舞鶴要港部造船課入業、同工作部教習所教習科に入学、昭和十一年三月同教習科三学年卒業、昭和十二年三月同教習所研